漢文の窓②

現在も使われる故事成語

教材のねらい

我々の身の周りにも故事成語は使われているが、それとは気づかないことも多い。新聞やネットニュースの見出し、小説や評論、はたまたSNSなどその場面は多岐にわたる。ここでは随想・小説・新聞記事に使われた故事成語を紹介し、「故事成語」の単元を通じて学習したものが実際にどのような場面で使われているのか、という視点を育てることを目指したい。

作者

北大路魯山人　明治十六（一八八三）年～昭和三十四（一九五九）年。京都府の生まれ。本名は房次郎。芸術家、陶芸家など様々な顔を持つ。料理研究のかたわら食器制作に取り組んだ。会員制の料亭「星岡茶寮」を営むなど、食に関する探究心が強く、著述も多い。

吉川英治　明治二十五（一八九二）年～昭和三十七（一九六二）年。神奈川県の生まれ。小説家。大衆文学の第一人者であり、国民作家と呼ぶにふさわしい作品を数多く執筆した。代表作は『新書太閤記』『新・平家物語』『私本太平記』など。

出典

お米の話　食全般に造詣の深い筆者が自らの体験をもとに、お米と料理との取り合わせや、「ご飯を炊く」行為も立派な料理であることを綴った随筆。本文は五月書房『新装愛蔵版　魯山人著作集　第三巻　料理論集』一九九七（平成九）年によった。

三国志　戦時中に新聞小説として連載された作品。中国元代末期に書かれた『三国志演義』を元に、吉川が日本人向けにアレンジを加えて大衆文学へとしたてあげ、人気を博した。引用部分は徐庶が老母の身を案じて許都へと帰るため、信頼してお仕えしてきた劉備に別れを告げた場面。本文は講談社『吉川英治歴史時代文庫36　三国志』（四）一九八九（平成元）年によった。

日本経済新聞　十五面「大機小機　朝三暮四の経済政策」令和元（二〇一九）年七月十三日によった。

参考

「お米の話」

近頃は以前のように、やれ播州の米がうまいとか、越後米にかぎるとかいうような話はあまり聞かない。ただ米でありさえすればあり難がるご時世ではあるが、しかし以前でも、米の味に詳しいというひとは少なかった。

うまい米といえば、その昔、朝鮮で李王さまにあげるために作っていた米がある。これはすこぶるうまかった。収穫は非常に少ないが、米粒の形もよく、見たところもきれいな米であった。た

だし、あまりうますぎて、副食物がご馳走の目的の場合には使えない。うますぎるというと変に聞こえるかも知れないが、元来米というものはうまいものである。うまいものの極致は米なのである。うまいからこそ毎日食べていられるわけなのである。特にうまい米は、もうそれだけで充分で、ほかになにもいらなくなってしまう。殊にライスカレーなんてものに使う米は、少しまずい米でないといけない。たとえば玄米だ。

玄米は白米とは別な意味で非常にうまい。玄米のごはんにご馳走をつけて出すのは蛇足である。漬けものでもあれば充分である。だから、いくらうまいといっても、料理の後では邪魔になる。

ところが、一般の家庭はもちろんのこと、多数の料理屋がこのごはんというものについて、とても注意が足りない。

料理屋がそうだから、料理人はみなそうである。料理長というものは板前といって、俎板の前に座って刺身ばかり作っている。本当の料理人ならば、仮に自分で飯を炊かなくとも、飯がうまく炊けたかどうかということについて、相当気になるはずである。なぜなら、せっかくいい料理を作っても締めくくりに出る飯がだめだったら、すべてがぶちこわしになってしまうからである。

ところが、料理屋というものの多くは、酒飲み本位に工夫されているために、たいていの料理人は自分の受け持ちの料理さえ出してしまうと、後の飯がどうであろうと、一切お構いなしで帰ってしまう。それでは料理人としての資格はゼロに等しいといわれても、彼らは一向に頓着しない。理想がないからだ。

一般に飯炊きというと、料理人ではなく、雑用人として、一段と下った仕事として扱い、ろくな給料も出していないが、ずいぶん間違った話である。

だから、星岡茶寮時代、わたしのところへ料理人が来ると、君は飯が炊けるかと第一に聞いてみる。なかなか自信をもって、答のできる者はいなかった。

とにかく、飯は最後のとどめを刺すものであり、下戸（げこ）には大事な料理である。料理をするほどの者が、自信をもって飯が炊けないということは、無茶苦茶な振舞いであり、親切者とはいえないことになる。

それにもかかわらず、料理人は自分の苦労の足りなさを棚に上げて、飯を炊くということは、なにか自分の沽券にかかわるもののごとく考えているらしい。浅ましい話だが、それでは先生はごはんをお炊きになりますか、と聞くものがあった。わたしは言下に炊けると答えた。

料理人は飯なんてものは、無意識のうちに料理ではないと考えているらしい。ところが、飯は料理のいちばん大切なものなのである。料理ではないと思うところに根本的に間違いがあり、まずい飯ができるのである。

洋食でパンの良否を問題にしたり、焼き方を問題にしたりするのとまったく同じなのである。だから、飯は料理ではないという考えを改め、立派な料理だと考えなければならない。

この意味で、料理人は飯の炊き方に注意しなければならない。わたしは断言する。飯の炊けない料理人は一流の料理人ではない。主婦、女中、飯炊きについても、同じことがいえるのである。

（五月書房『新装愛蔵版　魯山人著作集　第三巻　料理論集』一九九七〔平成九〕年）

大機小機

朝三暮四の経済政策

先日、経済産業研究所のセミナーで「日本経済低成長からの脱却」という話を聞いた。興味深かったのは最近話題の現代貨幣理論（ＭＭＴ）と、一昨年話題になったシムズ理論（ＦＴＰＬ）の話だ。

２つの理論は正反対のことを言っている。ＭＭＴ理論では、財政をもっと出してもインフレにならないから景気のために財政出動すべきだという。シムズ理論では、財政をもっと出せばインフレになるからデフレ脱却のために財政出動すべきだという。

財政出動すべきだというのは同じだが、かたやインフレにならないからといい、かたやインフレになるという。それがまかり通るのは、どちらも「理論（Ｔｈｅｏｒｙ）」と言っているが、実は「モデル」で、前提の置き方でいずれの結論にもなるからだという。

講師が「モデル」の例として挙げたのは、マルクス主義経済学。価値を生み出すのは労働だけだという前提を置けば、資本家の取り分は労働者からの搾取になる。そこで、その不正義を改める革命が必要になるのだという。

そのように「モデル」は融通むげだが、ケインズ経済学の「理論」の中にある限り、経済成長は導き出せないという。ケインズ経済学は景気回復の「理論」で経済成長の「理論」ではないからだ。経済成長のためにどうすればいいのか聞かれたケインズは、アニマルスピリット（起業家精神）と答えたのだそうだ。

要は財政出動をすれば一時的に景気は良くなるが、成長にはつながらないということ。不況でもないのにそんなことをしても、財政出動の効果がなくなれば、景気は元に戻って成長率も元のままというわけだ。ＭＭＴ理論の最大の実践国が日本だと言われることがあるが、日本の経済成長率は低迷し、かつて世界の２～３位だった１人当たり国内総生産（ＧＤＰ）が、今や経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）諸国で最低水準の26位というのがその証拠だという。

講師によれば、財政出動で経済成長をというのは朝三暮四の経済政策だ。猿に、トチの実を朝３つ夕方４つと言ったら騒ぎになった。そこで、朝４つ夕方３つと言ったらみんな喜んだというのと同じというわけだ。本当の成長戦略を行えば、経済成長率はもっと上がり、みんな豊かになるはずだというのがご託宣であった。

（唯識）

（『日本経済新聞』15 面　令和元（2019）年 7 月 13 日）

（宮　利政）